

EGG

ノクターン



鞍馬 柊音 著

目次

プロローグ	1
キャンディちゃん	2
賞金稼ぎ	6
不信感	10
心情	14
束の間の幸せ	19
現実に戻る	24
パープルアイ	29
ララ	34
最強と共に	37
ノクターン	45

プロローグ

私がアメリカに来たのは、丁度五年前。

二十歳そこそこだった私は、恋人と駆け落ちし、すぐに破綻した。

勢いで家を飛び出しただけに家にも帰れず、行く当てのない私は幼い頃からの夢だった映画業界にあこがれてアメリカのロサンゼルスへと飛び立った。

若さゆえ、細かいことは考えていなかった。数えるほどの所持金と、すぐにでも崩れ落ちそ

今思えば、その時は自分の中にあるドラマに酔っていただけだったんだと思う。若さゆえの

アメリカに渡った私は、すぐ途方にくれた。言葉も解らない。

三日と持たずに所持金も尽きた。当たり前だが国にも帰れない。

とにかく働かなければとバイトを探した。しかし、どれも長くは続かなかった。

続く筈もない。簡単な言葉すら理解できない芸もない。そんな女誰が雇うんだ。

それでも『今日』を生きる為に必死だった。負けん気だけは強かったから、それは今でも変わりはない。

あれから今日まで『今』だけを見て生きてきた。

いつしか現実から、遠く遠く逃げていたのかもしれない。

——死ぬことなんて恐れちゃいない。

もっと、もっと器用に生きていけたのなら『怖い』と思えたのかもしれない。

キャンディちゃん

一発の銃声が空気を震わす。
より鋭く、より悲しく。
聞きなれた、ある種『音楽』だ。

人殺し。

それが私の仕事だ。
ただ、誰でも殺すわけではない。法による、法の下で。
いわゆる『賞金稼ぎ』というやつ。
人が人を裁くとは、なんと傲慢な話だろうと誰かが言った。
私はそうは思わない。
思わないというより、何も考えてはいないだけ。
私は、今日という日が生きていければそれでいい。
お咎めの代わりに今を生きる為の代金がもらえる。それだけのこと。

狙い定めた銃弾は、外すことなくターゲットの心臓部を貫く。
獲物はまるで赤い薔薇の花束でも抱くように、まるで赤い薔薇の花びらを散らすかのごとくゆっくりと地面にひれ伏した。
続きざま頭部に再び銃弾をぶち込んで、呼吸が止まるのを確認してからナイフで身体をバラすのだ。

バラした遺体は、ドライアイスの敷き詰められた発砲スチロールのボックスに詰め込んで警
ただ一つ、肉体に刃物を入れるときいつも思うことがある。
悪人であっても善人であっても、肉体を流れる血の色は同じだ。濁りのないただ綺麗な深紅の液体が、差別なく体中を巡っているのだ。

——感情は必要ない。
——器用に生きる必要もない。

器用に生きられないからこんな稼業になったのかもしれない。
常に孤独が憑いてまわる。

自分の為だけにしか、生きることが出来ない人間、だ。

眼帯を付けた年老いた感じの白髪の男からいつも情報を買う。

男は大抵、行きつけの小汚いバーで酒を飲んでいる。

メニューは決まってハーフ&ハーフ。

私も同じく珈琲色のビールジョッキを手にとって、白髪の男と相席に座った。

もちろん、了解なんてなしさ。

頭上では蜘蛛の巣を絡めながら、大きな空調がのろのろと回転している。

こんなところで酒を飲む奴は、自分も含めてきっと人生に失敗した奴らだけだろうと私は思っている。

「他に席なら開いてるよ」

ずいぶんとしゃがれた声で、情報屋は意地悪く吐き捨てた。

「おあいにく様。ずいぶんな態度だね、常連客だろう」

こちらも負けずと皮肉って吐き捨てる。

「キャンディちゃんに売るような情報なんてないね」

なんて奴。まあ、いつもの事なんだけど。

「別に見合い相手を見つけて欲しいとか言うわけじゃないんだ。パープル・アイとかいう奴について、なんか知ってるんだろう？ 皆噂している」

ビールを飲み干しながら、それとなく問いかけた。

パープル・アイ。

十数年前、どっかの国で人を沢山殺したとかいう殺人鬼らしい。

どっかの国の田舎町で、その上事実を知ってる人も殆どいないとか、その時生き残った人も失踪したとかしないとか。

だから詳しいことも真実も今となってはわからないけれど、どうやら最近アメリカに出没したとかでお触書が回っているらしい。

なんでも、パープル・アイについて探った奴は手際よく皆さんホトケサマなんだとか。真実を知る奴もいないから、実際今パープル・アイとか呼ばれてる奴がそのときの殺人鬼かどうか怪しいものだそうだ。

情報屋は鼻で笑った。

「あんた、奴を狙ってるのか？」

「安いカモだけどね」

私は、口元に出来るだけ意地の悪い微笑を浮かべた。

そして一気に胃袋へ流し込んだビール。ジョッキには、まだ三分の一程残っている。それをテーブルに置いて立ち上がった。

「ノクターン遺作。リクエストできるかな？」

テーブル越しにマスターに一ドル札を渡すと

「どうだろう？ 彼はそんなに上手くないからねえ」

と、店の隅で調律の狂ったピアノを弾く赤毛の青年を、親指で隠すようにして指差した。ここで知り合ったマイフレンド、ついでを言うと『愛想だけのヘタクソピアニスト』の

異名を持つアルバートだ。

彼のピアノは誰一人聴いちゃいない。でも、彼はいつも楽しそうにピアノを弾く。

「わかってるよ」

と、思わず苦笑い。

「レコードでお願い」

マスターが三回手を叩くと、アルバートは不機嫌そうにピアノから立ち上り、キッチンへと入っていった。彼の大事な仕事である皿洗いへと戻っていったのだ。

レコード独特の、ノイズの入った古臭いピアノ曲が、店内を静かに響かせはじめた。

再び席へ戻る私。

「ほお、ショパンかい」

と、情報屋。

「いつもの事じゃない」

私はショパンが好きだ。

音楽でしか感情を表せない。人を愛し愛され、それでも不器用に、不器用ゆえ孤独に死んでいった音楽家。

彼の描く音楽は、彼自身のように孤独で優しい。それでいて、悲しく温かい。

何よりも繊細で上品だ。あたかもそれ自体が生きてるかのようで、時には感情的にうねり情熱に狂う。春と夏の間、夏と秋の間、秋と冬の間のように季節の変わり目によく似ている。

静かで……なんと表現するのが適切か上手く現せないが、どちらとも呼べない不器用な季節のようなのだ。もっとも悲しいからこそ美しいのかもしれない。

情報屋は白々しくビールを飲んだ。そして、おかしな事を呟いた。

「パープル・アイは義眼なんだ」

「へえ」

迷うようにして情報屋が言った。

「確実に死ぬぞ。やめておけ」

突然の情報ではなく警告のような口調に、私は少々驚いた。

「何故そう言い切れる？」

動揺を隠すかのようにゆっくり問い返した。

この男は知らなくてもいいことを知っているように思えた。言えば確実に死神は大鎌を振り下ろし、実際に今にも自分が首を刎ねられんとされているかのように。もちろん、知ってしまった者への代償も間違いなく『死』だ。

「皆、死んだからだ」

「何を知っている？」

「何もしらないよ」

「白々しいわね」

仕方なし、私はジョッキの中のビールをぐいっと飲み干した。これ以上話をしていても無駄だと踏んだのだ。

ビールの苦味が口の中の唾液をぎゅっと絞り止める様で、炭酸が口の中を刺激して唾液を誘うようで、なんともセツナイ味だ。

「死ぬことなんて、恐れちゃいないよ」

ぽつんと呟いた。初めて米国（こっち）へ来たときから、そう思ってる。クダラナイ私の一生早く消えてしまえば良いのにと、どんなに願ったことか。だからこそ、こんな稼業に辿り着いてしまったんだろうと。

「恐れるさ」

そう否定すると、情報屋もジョッキの中のビールを飲み干した。そこに、いつものような表情はなかった。無表情。

「まだ若いんだ、銃の腕を磨くより女を磨けよ。恋人の一人もいないんだろ？」

恋人は普通一人だろう、と思いながら頭に来て立ち上がった。

「余計なお世話。男なんてロクでもないね」

睨み付けてやった。

「どうして、俺の知ってる人間は皆独りを背負い込むんだろうね」

飽きれる様にぶつくさ言いながら、私より先に去って行ってしまった。

ぽつねんと残された私。

「なにさ！」

軽く机の脚を蹴っ飛ばし、誰にも聞かれない遠吠えを吐き付けるようにして、女であることを呪った。

いつもこうだ。女だからと情報を出し洩る。

ノクターンの悲しい音色が、心臓の奥をえぐる様にしてしんみりと響き渡る。このまま去るのもみっともなく、普通に座っているのも辛くなってきて、テーブルの上に伏せるようにしてもたれかかった。

暫くしてアルバートが小さなグラスを持ってきた。

「なに？」

「バーボン」

「あほ」

気付く薬とでも言いたいのだろう。決まって私が伏せていると彼は何故か持ってくる。それもまた、ぐいっと飲み干して、喉の焼ける痛みに集中した。

「ま、人生色々だ」

意味わからず、思わず吹き出して笑ってしまった。

彼がキッチンに再び戻るのを確認しながら、タバコに火をつけた。立ち上がる紫煙を見つめていたら、ため息さえ付けなくなった。

「……孤独で何が悪い……」

賞金稼ぎ

結局、パープル・アイの情報については『義眼』だという、くだらない事ぐらいしか収集できなかった。

あれから三日くらい後だと思う。諦めかけた頃。

「やあ、フォックス！」

と、あのヘタクソピアニストのアルバートが昼過ぎに家へ訪ねてきた。

実は彼も隠れ賞金稼ぎ。私をこの世界に誘った一人だ。でも彼は安くて簡単な仕事しかしないから、昼間はバウンティハンター、夜は酒場のアルバイトとして働いている。とりあえず銃は持っているらしいのだが、使ったところを見たことがないから腕前は解らない。

その二十歳そこそこの赤毛の好青年は、何故かうきうきとしていた。

「なんか用？」

「パープル・アイのこと、狙ってるんだろ」

ショートパンツにだぶだぶのTシャツ、おまけにすっぴん。彼はそんなだらしのない私の姿にお構いなしで、私の腕を引っ張った。

「ちょ、ちょっと待って。急になんなんだよ」

「ジェヴィットが連れて来たってさ！ 彼もパープル・アイを狙ってるんだってよ」

「はあ？」

「仲間探しに苦戦してるんだって。このヤマ結構大変みたいだよ。賞金額聞いた？」

ジェヴィットとは、私を賞金稼ぎの世界へ誘い込んだ張本人。頼れるお父さんみたいな存在だ。

「知らないよ。私は、噂で聞いただけだから。まだ本当にするかどうか決めてないし」

「なら尚更いいんじゃない？」

再び引っ張った。再び振りほどこうとする私。

「わかったから、着替えくらいさせて!!」

ほんっと、デリカシーの欠片もない！

二十分程度だったと思う。軽く化粧をしてテーラードの赤いスーツに着替え、愛用の銃もしこんだ。おまたせ、と外に出ると、アルバートが車の前で待っていた。にこにこドアを開けながら言った。

「どうぞ、お姫様」

「どーも、王子様」

アルバートの車は、見慣れない道ばかりを走る。私は何も聞かず、ただただ助手席で迷惑なくらいにタバコを吹かしていた。

**** *

約一時間程度車を走らすと、廃墟になった工場の立ち並ぶ汚い場所に辿り着いた。

草ぼうぼうだし薄気味悪い。なんか出そう。

何も聞かなくてもアルバートが勝手にしゃべってくれた。

「昔ジェヴィットが働いていた工場らしいよ。工場が潰れて職を失ったとき、ここを秘密基地に賞金稼ぎになったんだって。薄気味悪いだろ？ おかげで変な噂も立って、隠れ家にはもってこいの場所だよ」

「ほう」

特に興味もなさそうに返事だけして車を降りた。

じっくり見れば見るほど、あんまり入りたくはない場所だ。

少しの間立ち尽くして彼を待つと、アルバートの少し後ろをついて歩く。

彼は慣れた足取りで破れた網目と有刺鉄線の間を潜り抜け、無造作に覆い茂る雑草の間の獣道を辿りながら中へ中へと進んでいく。

「そういえば昔、酔っ払った勢いで聞いた覚えがあるな。お得意のお説教のついでだったから、あんまり覚えてないけど。なんの取り得もなさそうな工場職員がバウンティハンターなんて、世の中面白いね」

「ジェヴィットは、こっちの稼業のがあってるってさ」

いないことを良い事にけたけた笑う。

暫く草の間を縫うようにして進んでいくと、シャッターが三分の一程度開いた中でも綺麗なところに辿り着いた。

私は普通より身長が低い為そこまで屈み込む必要はなかったが、アルバートはヒョロ高いのでちょっとだけ苦しそうに見えた。

中では、壊れたベルトコンベアがそのまま放置されていた。

「連れてきたよー」

と、アルバートが叫ぶと軽く工場内がこだました」

「おう！ ご苦労。お前らやかましいから、そんなに声を上げなくても聞こえるさ」

奥から、はっはと笑いながらジェヴィットが現れた。暗くて解らなかったが、案外近くにいたようだ。肌が黒いからよくわからなかった。

格別大きくて筋肉質な体付き、温厚そうな笑顔の映画に出てきそうな黒人男性だ。年齢は五十代前後、私よりも頼りにしている存在だ。

「久しぶり」

「フォックス、相変わらずだな」

笑いながら言う。

「男らしいよ」

「お蔭様、この前情報屋にも説教されたわ。銃の腕を磨くより、女を磨けてね」

「言えてるよ。そろそろ花嫁修業もするんだな」

「ほっといてよ。それより、パープル・アイについて教えてよ。私は何にも知らないの」
これ以上その話題は嫌だと話を逸らした。

ジェヴィットは情報屋とは違って、気前良く情報を提供してくれた。もちろん無償で。

「ああ、でも一人でやろうと思わないことだな。危険すぎる。俺だってピリピリするくらいなんだから。まず賞金なんだが、生きてまま引き渡せば五千万ドル、死体を渡せば四千万ドルももらえるらしいよ。どうだ、オイシイだろ。どんな奴かって？ おっそろしい奴らしいよ。殺しの天才らしい。それでもって、少しでもパープル・アイの情報を握った奴は皆殺されてしまうんだって。俺はたまたま奴のちょっとした情報を聞きちまって、殺されるくらいなら狙ってやろうと思ったわけよ。なんでも奴は、何百人殺したかわからないらしいぜ。パープルの義眼が特徴らしい。だからパープル・アイなんだと」

「そう。他に特徴は？」

「あー。なんせ謎の多い奴でなあ。他にはないんだが、向こうから来るだろうよ」

なんとも楽観的だ。

「ところで仲間は何人？」

「お前入れて四人だよ」

「四人？」

ジェヴィットが訳のわからないウィンクをした。

「ララ来いよ!!」

死んでしまった冷たい室内に彼の凶太い声が響き渡ると、ナルシストにも聞こえる鋭い革靴の堅い足音がコンクリートの室内を響かせた。

なんとなく嫌な感じだ。同時に奥から背の高いすらりとした男が現れた。多分、私よりちょっとだけ年下っぽい。ちょっとぶりすかした感じというか、どこか見下した感じというか……何か冷たいイメージの視線が気に食わない。

おまけに月のように綺麗な銀髪と、見入ってしまう程綺麗な瑠璃色の眼が何故か妙に癩に触ると言うのだろうか。とにかく、胸騒ぎにも似たような嫌な感じがした。

ボソッとアルバートに話しかける。

「幸薄そうな男ね。おまけに殺し屋でも気取ってんの？ だっさ」

彼は苦笑いだけをこっそり私に返した。

ララとか呼ばれた男はラピスラズリのような眼で私を捉えると、三フィート程間を空けて歩みを止めた。淡いブルーのシャツに紺のスーツとネクタイ。薄手の黒いロングジャケットを羽織っていた。

近くで見て、その嫌な雰囲気と年下にも見えた童顔な要素が髪形にもあるのだと思った。セミロングに伸ばした髪の間から睨み付ける左眼はピッタリと私を捉えたまま、右目は何故か昔の妖怪漫画の主人公よろしくよく見えない。

こっちも負けじと睨み返してやった。

「ララ、こっちのお姫様がシルバー・フォックス。俺の娘みたいな奴だ。それから隣がアルバート・ラヴス。昔からのパートナーさ！ それから二人とも、新しい仲間のララ・シェルクスだ。腕は最高に良い!!」

「ジェヴィット、褒めすぎだよ」

困ったように笑った。

「やあ」

と、ララとか言ういけ好かない男は私に手を差し出してきた。

「どーも」

私は拒否する代わりに、タバコに火を付けた。

まずい！と思ったのか、アルバートが私の代わりに握手した。

「おいおい！ フォックス、頼むから仲良くしてくれよ」

軽く舌を見せてすぐ引っ込める。

「私はいつだって友好的よ。ねえ？」

話を振られたアルバートは、わたわたするばかり。実に情けない。

「俺のこと嫌いみたいだね」

ララがぼそりと呟いた。

「ええ、大好きよ。とってまね」

実に厭味ったらしく、出来るだけ毒々しく言ってやった。

「子供じゃないんだから。お前がこういうタイプを嫌うのは解るけど、仲良くしてくれよな。第一、ララは人見知りするだけで実際めっちゃくちゃ良い奴なんだぞ」

ジェヴィットのあほ。

「解ってるわよ」

その妙な信頼が一番気持ち悪いのよ。

不信感

ジェヴィットに案内され工場の奥に進んでいくと、無造作に積み重ねられた大きな木箱が置いてあった。木箱には“Apple”と印刷されている。

ジェヴィットが釘打ちされた蓋を釘抜きでバキバキとはがすと、中にはやはり真っ赤に熟れた林檎が発砲スチロールに守られながら並んでいた。

「林檎売りでもやるの？」

「まさか！ 喰うか？ 持ってけ」

と、一人では食べきれないくらいの林檎を貰った。それでも箱は二重底になっているようで、思ったより数は少なかった。

続いて発砲スチロールを退けて底を外すと、中からは不気味に黒光りする手榴弾やら火薬やらマシンガンやらが大量に出てきた。

「リスクが大きいからな、今回は多めに買い揃えたんだ。もちろん、分け前からきっちり引かせてもらうけどな」

大量の銃火器を眺めていると、まるで自分がテロリストにでもなったように思えてくる。

「フォックス」

あっけにとられている私を、ジェヴィットが呼び戻した。

「お前は女だ。それに、大したことはまだ知らない。引き返す事だって、まだ出来る」

そのジェヴィットの表情に、ふっと笑う。

「ありがとう」

そのあとすぐ、アルバートに家まで送ってもらった。

ずっと車の中で、一瞬だけ見せた恐怖を背負ったようなジェヴィットの横顔を考えていた。

初めて見せた、そんな暗い表情。

正直、怖いと思った。

癪に思えたんだ。断る、と言うことが。だから何も言わず、ただただ断る理由を探すかのようにジェヴィットに電話していた。

三回目のコールで彼は出た。いつもと変わらない、明るい声。

「フォックスだけど、ララについてどうしても気になったんだ。どういう経緯なのかって」——信頼……出来るんだろうか？ 無意識に感じていたのかもしれない、そんな不安にも似た疑惑。

しかし、その返答は彼らしくない、というか意外なものだった。

『ララもパープル・アイを狙ってるんだ。酒場で先月知り合ってたな、すっかり息があっちまって。今回が共にする初仕事ってやつだよ。パープル・アイ情報の殆どは彼からだ。ど

うせなら大きなヤマをやろうってな。いつか、一度は大勝負してみたかったから。以前からパープル・アイの噂は聞いてたんだが』

「そんなんで、信頼できるの？」

『大丈夫だろ。なんたって、銃の腕はもちろんナイフ裁きも上等だ。そのうえ、体術まで扱える』

そんな、問題ではない。

「ジェヴィット、私はこの仕事に命を賭けてるの!! そんなろくに知りもしない男を信用しろと!?! どうかしてるわ」

怒鳴りたい気持ちを押さえ込みながら、出来るだけ優しく咎めつけてやった。

彼は言う。

『安心しろって。ララは信頼できる』

これ以上何を言っても無駄なので、とりあえず私は電話を切った。

——こうなったら、私はララを信頼しない。

——絶対に!!

不安にも似た疑惑は、怒りをまといつつも、ただの不安にしかならなかった。

ララの眼を思い出した。少しばかり紫を帯びた、深く綺麗な紺色。その中に光が映ると、まるで星屑をちりばめたように見える。ファンタジックな、ラピスラズリのような眼。ララ自身彼の綺麗な銀髪によく映え、おとぎ話から現れた妖精よろしく思えるのだ。

それなのに、妙に無機質で冷たい視線が気になる。時折交じり合う殺気は、無意識にもぞっと鳥肌を立たせる。

「そうか、殺気か」

私は、煙草に火をつけた。

ゆっくりと吹かしつつ、天井に上る紫煙を何度も何度も見送った。

煙草を吸い終わると、気を取り直してパソコンの前に座った。ディスプレイのスイッチを入れると、アニメチックな魚が泳いでいる。いつものソフトを立ち上げて、自分だけの日記を書くことにした。

私は日本出身だ。五年もいればそれなりに英語は話せるものだ。けれども、逆に日本語を忘れてしまう。だから忘れないように、毎日日本語で日記を付けるようにしているのだ。それから元々本も好きだったから、日本語の小説を探してきては時間を見つけて読むようにしている。中でもハードボイルドな小説が私のお気に入りだ。それも、アウトローなのがいい。私みたいで。

アメリカに来てから名前も家も捨てたはずなのに、語学だけは捨てられなかった。なんにせよ、生きていく条件の一つとして役に立つからだ。それに、私が日本人だという事実は、頑張ったところで覆せないから。

日記を書き終わると、読みかけの小説に手を伸ばした。あと三分の一程度で読み終わる。読み始める前に、静かなクラシックに切り替えた。ショパンはもちろん、バッハやチャイコフスキー等の代表作が組み込まれたCDだ。お気に入りの音楽を聴きながら大好きな小説を読むのが、今では唯一の安らぎになってしまった。

クライマックスが近づくとつれて、完全に現実から離れてしまった私の意識を呼び戻したのは、はた迷惑な玄関のチャイムだった。時間を確認すると午後十時。

こんな時間に誰だと思いつつ玄関に向かい、ドアノブに手をかけて嫌な予感を感じた。

「こんな時間に誰？」

すると、ドア向こうの人物は気まずそうに答えた。

「ララだよ」

完全に、招かざる客だ。

「なんで家が解ったの？」

「ジェヴィットから聞いたんだ」

最悪だ！ あのオヤジ!!

私の大っ嫌いな男。いけ好かない野郎。

「私は忙しいの。何か用があるならさっさと行ってよ」

「用って程じゃないんだ」

「なら、帰って」

私は扉も開けず、無視して部屋の奥へと戻っていった。

腹が立ったので、もう寝ることにした。クラシックのCDを流行のヘヴィメタルに入れ替えて、お風呂の用意を始めた。

シャワーを浴びた後、決まって赤のバスローブを羽織る。冷蔵庫から安い割りに美味しく気に入ってる赤ワインを取り出すと、グラスに半分注いだ。なんせまだそんなに眠くもなかったもので、先ほどの小説を読みながら眠ることにした。CDを再びさっきのクラシックに入れ替えると、なぜか奴のことが気になった。

いるわけない、いないで欲しいと思いつつ再び玄関に向かう。そっと慎重にドアを開けて外を見ると、やはり誰もいなかった。安心して扉を閉めようとしたら、何故か物凄い勢いで扉を引っ張られ、思わず前向きに転倒しそうになった。

「きゃあ!!」

ヤバイ!! と思った瞬間、誰かが私をがっしりと受け止めた。

瞬間、鼻孔一杯に心地の良い独特な匂いが広がり、一瞬頭の中がくらくらとした。

「ご、ごめん。こんなに派手に転ぶとは思ってなくて」

カチン、と来た。

遅い腕を掴みつつ、上体を起こそうともがきながら相手の顔を見上げると、あろう事かやはり私の嫌いな男がそこには立っていた。

「もう、なんなのよ！ あんたは」

「話くらい、聞いてくれたっていいじゃないか」

優しく私を起こしてくれながらも、何か鋭い口調に心臓がどきとした。

「用はないんでしょ？」

「用ってものじゃないけど、もっとゆっくり話がしたくてきたんだ。俺のこと信頼してくれてないみたいだし」

「当たり前でしょ！ ロクすっぽ知りもしない人間、どう信じろと？」

「仲間にはなれないのかな？」

ぽつんとそう言いながら、悲しそうな眼で苦笑を見せる。

「少なくとも、私はある人を信頼なんてしない。パープル・アイだって、それほど興味もないし。ジェヴィットみたく、大きな賭けをしたいとだって思わない。あんたとするくらいなら、一人で安いカモでも狙うわ」

冷たく言い放ってやった。

ララはそれから暫く無言でいた。気まずくなって、じゃあと切り出したのは私からだった。扉を閉めようとしたとき

「……俺……降りようか？」

と、力なく聞こえたから

「私が降りる」

と、だけ言って扉を閉めた。

多分、これがララの狙いだったのだろうと。この時の私には思いも付かなかった。

心情

次の日の昼過ぎ、私から直接ジェヴィットに逢いに行った。彼は庭で、机を作っていた。

「ジェヴィット、何してるの？」

「やあ！ フォックス。机の脚が折れてなあ、直してたんだ」

と、はっはと笑う。妻も子供もいなくせに、立派なお父さんみたく思える。

いない、というか昔はいたらしいので、そう見えても不思議ではないのかもしれない。

工場が潰れて職を失ったばかりのとき、途方にくれて飲んだくれていた姿に呆れて出て行ってしまったとか。

何年も前の写真を、今でも大事そうに持ち歩いている。写真の中の家族は、今なお変わらずに幸せそうだ。

酔っ払ったとき、いつも見せてくれる。

「今日はどうしたんだ？」

「どうしたんじゃないわよ。ララに家教えてでしょ」

不満そうにクレームを出す私に、ジェヴィットは少しも悪いと思わないのか、釘打ちを続けながら言った。

「お前が帰った後、ララが凄く気にしてたんだ。少し迷ったんだが、今度は自分一人でゆっくり話してみるからって聞かなかったからなあ」

「もう！」

これ以上言ってもジェヴィットのことだ。仕事仲間だとか、済んだことだろうとか言われて、話が解決しないのは眼に見えている。

私の方が折れることにした。

「今度からは、私に断ってからにしてよね」

「はいはい」

本当にわかってるんだろうか？

「まあ、いいわ。ところで仕事についてなんだけど、色々考えてみてやっぱり降りようと思うんだ」

「そうか」

と、何故だか安心したような顔つきを見せた。

そのあとすぐ妙に険しい顔になり

「一人でやる気じゃないだろうな？」

と聞いてきた。だから、笑いながら答えてやった。

「まさか。私はパープル・アイとか言うやつにそんなに興味もないし、大きな賭けなんてしたいとは思わないから。そりゃ、ポルシェに乗ったりブランドの新作バックなんて欲しいとは思うよ。でも、明日のご飯が食べられればそれでいいと思っているの」

ふふっと笑う。

「また、気が向いたら来いよ。飯ぐらいご馳走してやろう」

「ありがと」

何となく小腹が空いていた。当たり前だ。昼近くに起きて、そのままジェヴィットに逢いにきたから。

帰り道、ファーストフードのドライブスルーに寄ってから帰った。

これで、肩の荷が下りたとちょっぴり嬉しかった。が、数分後その喜びは一気に打ち碎かれることになったのだ。

家に着くと、あろうことかララが待っていたのだ。何故だか玄関で煙草を吹かしている。

「ストーカーか、あいつは」

Uターンしようとしたら、ララが気がついて手を振ってきた。

「うげ」

あんまり頭に來たので、車を家の前で適当に止めてから乱暴にドアを閉めて怒鳴ってやった。

「人んちの前で何してんのよ」

「乱暴だな」

と、苦笑いを向ける。

「昨日、追い返されてまだ懲りてないの？」

と、言う私を無視するこの男

「今日はラフなんだね。昨日のスーツも良かったけど」

と言った。

「あんたね、私はついさっき仕事を降りてきたの。だから、もうあんたと仲良くする理由はないの。わかった？」

冷たく言い放って、車庫に入れるため車に乗り込もうとした私に向かって、奴は笑顔でアホなことを叫びだした。

「俺は好きなんだけどなあ、フォックスのこと」

開いた口が塞がらないとはこのことだ。

「そういう台詞は、薔薇の花束でも抱えてきたらにしてちょーだいな!!」

車を止め直しても、ララはまだ居た。

ファーストフードの袋を見ながら言う。

「ファーストフードはあまり身体によくないんだよ。俺料理得意なんだ。食べにおいでよ」
何故ゆえに、若い乙女が訳のわからん男の家に行かねばならんのか。

無視して家に入ろうとしたら、鍵が見つからない。

おかしい。

車の鍵と一緒にキーケースに付いているのだが、そのキーケースがない。

さっき車を降りてすぐキーケースはポケットに閉まったはずなのに。

「ほら、鍵がないなら俺んちおいでよ。今夜グラタン作るんだ」

「ちょっと、あんた黙っててよ」

グラタンは好きだが、この男は嫌いだ。

電話をかけようとしたが、電話もない。

家の中かな。益々困ってきた。

車も使えないではないかと情けなくも鍵やら電話やらを探しまわる私を、ララはうきうきしながら眺めていた。

「ねえ、日が暮れるよ？ 俺はフォックスと仲良くしたいだけなんだ。別に何かしようとか思ってる訳でもないしさ。安心しておいでよ」

どうやらこの男は、何がなんでも私を家に連れ込みたいらしい。何もしないよという男に限って、何もしなかった試しがないのだ。第一“好きだ”とか“安心しろ”とか言われて、はいそうですね、とついて行く女がどこにいる。

車の中もポケットの中も鞆の中もくまなく探し、やはりないとわかって酷く落ち込んだ。大きなため息を吐いたら、またララが話しかけてきた。

「車出すよ。来ない？」

この際……致し方ない……。が、同時に興味があった、のかも知れない。

銃はあった。愛用の銃には、ちゃんと弾が入っている。

奴の鼻頭に突きつけて言った。

「おかしな事したら、タダじゃ済まないよ」

銃を突きつけられた本人は、余裕の笑みで（否、寧ろ嬉しそうに）銃口を指先で引き下げながら

「そのときは、殺してくれてかまわないさ」

といった。

「言われなくともね」

* ** **

車を走らせて三十分くらい、少しだけ都会から近い場所にララの家はあった。

家というより、高級マンションだった。

入り口の門をくぐると小さな公園があり、まだ小学生に上がるか上がらないかの三人の子供が遊んでいた。

ララは小さなビニール袋一杯に詰め込んだお菓子を持って、車を降りた。

公園で遊んでいた子供がララを見て、嬉しそうにパーキングまで駆け寄ってきた。

「やあ！ ダニエル、エリック、サリー。仲良く遊んでた」

「うん。お土産は」

わくわくしながら無邪気に手を差し出す三人の子供に、ララはお菓子の袋を差し出した。

「仲良く分けるんだよ」

頷きながら公園へ駆けていく子供たちを見送って、何故だか心が和んだ気がした。が、不思議とその姿を見送るララの横顔は、どこことなく寂しそうに感じた。

私の顔が物言いたげにでも見えたのか、何も言っていないのに、ララは語った。

「近所の子供達だよ。親が共働きなんだ」

いこう、っと私の腕を軽く引いた。

マンションの中に入ると、飾りのシャンデリアがぎらぎらと私達を出迎えてくれた。吹き抜けの天井や壁にはプラネタリウムのように幻想的な星空やイラストが、ランダムに映し出されている。

奥の部屋を指差しながら彼が言った。

「このマンションはね、チャペルと繋がっていて、そこで結婚式をすることもできるんだ。俺が引っ越してきてから、三組ものカップルが結婚したんだよ」

「へえ」

別段、興味もなさそうに返事を返してやった。

エレベーターで七階に向かう。少し、頂上より下の階。それでも都会から近い分、夜景は綺麗だろう。少し、夜が楽しみだなと思った。

「ここだよ」と、案内された場所は、ララの匂いで一杯だった。

——どきん……と、心臓の鼓動が鳴った。

きちんと片付けられている、というより、いつでも引っ越せるような、そんな無機質で冷たい事務的な部屋だった。

そして、何故か痛いほど悲しくなった。

「何もない部屋だけど」

彼が、すまなさそうに苦笑を浮かべた。

一人で暮らすには、広すぎる部屋だ。

「こんな広い部屋に一人で住んでるの？」

「夜になると寂しいよ」

何かを隠すかのように無機質に笑いながら、煙草に火をつけた。煙草の火がじりじりと燃え、そしてそれをうつつに眺めていた。

「外で遊んでた子供達、時々遊びに来てくれるんだ。いつまで、遊んでくれるんだろうね」

私も、煙草に火をつけた。

「本当は寂しいの嫌いなんだ。でも、いつも独りぼっち。ただ、誰かと友達になりたかった。けど」

私も、衝動的に呟いていた。考えるより先に口をついて出た。そして、それは不思議とララとハモったコトバだ。

「……友達にはなりえない」

お互いがお互いを、同じ眼で見ていたのかもしれない。

私は私に怯えていた、ララはララを受け入れようとしていた。

ただそれだけの単純な答え。

『友達にはなりえない』。

ララは私に、私はララに向けられたコトバなんだと感じた。

今まで生きてきた中で一番痛いコトバのように感じた。

たぶん、きっと。私はララを、ララは私を、強い人間だと思ったに違いない。コトバの重みはお互い違うはずなのに。

「私は、自分がなくなってしまう方がいいのにと思ってる。死ぬことなんか恐れてはいな

い、けど、誰かを愛して失うことの方がよっぽど怖い。だから私は、自分を捨てたときからこれ以上持たないように思ってる」

ララが嗤った。

「悲しい女だな」

不思議と、厭味は感じられなかった。

「俺は、怖くて怖くて仕方がないよ。自分がなくなってしまうことが。泣いてくれる人がいないことが。誰もいなかったら、本当の孤独なんだと思うから」

煙草が、燃え尽きようとしている。

「フォックスは、強いんだ」

「否、逃げているだけ。過去から、罪から」

死を恐れない人間より、生に執着する人間の方がずっとずっと強い。

強いはずなのに、死を恐れる彼の方が、何故だかずっとずっと小さく感じられた。

束の間の幸せ

私のキーケースと財布と携帯が無くなったのは、ララの仕業だとすぐにわかった。夕食時それとなく言ってやったら、まるで母親に叱られた子供のように元氣なく返してくれた。

彼の作るグラタンは、私の作る母直伝の卵焼きより美味しかった

“帰らないで居て欲しい”というから“美味しい食事付きなら良い”と言ってやった。

あれだけ嫌だったはずなのに、一緒に居始めたらそんなに嫌ではない。

近所のスーパーに買い物だって、今では一緒に行っているのだから。

ラフな姿のララは、また違った表情を見せた。

スーツのあの冷たく気取った姿より、ジーンズやTシャツ姿のララの方が、私は好きだ。

子供のように無邪気で素直で。そして、存在が近く感じられたから。

「今日、ジェヴィットの家に行ってくるから」

「そう。まだパープル・アイを？」

「うん。現れそうな場所の情報が入ったんだって」

あれから二週間が過ぎた。あっという間であったが、私はとっくにパープル・アイのことなんか忘れていた。

「夕飯適当に食べとくよ」

「大丈夫だよ、夕飯までには帰ってくるから」

何気ない会話。それなのに、彼は何か少しそわそわとしていた。

「何か気になることでも？」

少し厭味っぽく聞いてやる。

「……しない？」

返答は、よく聞こえなかった。

「ごめん、もう一回」

彼は一度大きく深呼吸をすると、言いにくそうに切り出した。

「もし早く帰れたら、レストランでお洒落にディナーをしない？」

なんだか笑えてきた。“お洒落にディナー”、悪くはないが柄でもない。

「いいけど、マナーは知らない。ましてやドレスなんか持ってないよ」

「大丈夫。それまでに、シンデレラを変えた魔法使いが現れるから」

「それなら安心ね」

「そ、安心」

南瓜の馬車が現れるのを一人待つことにした。

暫くテレビを見てはいたが、あまりの暇さに欠伸が三回出た。

ララが家を出てから二時間弱。つまらないから、部屋の中をうろうろとしていたら、入ったことはもちろん、扉の開いたところも見つからない一室が気になった。

只の物置だとは思うのだが、気になれば開けてみたいのが人の情。

つまり、バレなければ良い。

という事で、こっそり開けてみた。

その部屋は外側が全てマジックミラーで、外が良く見えるようになっていた。中には、小さな古びたグランドピアノが一つ。

「あいつ、ピアノなんか弾くの？」

否、もしかしたら只のインテリアかもしれない。だとしたら、隠すのもおかしい。

母の形見だとか、そういった類なのかもしれないが。

ピアノはおろか、楽器とは縁がない。弾けはしないが、とりあえず蓋を開けてみた。

長年使っていない形跡がない。明らかに、つい最近まで使っていた……否、素人目で見ても、かなり使い込まれているのがわかる。

ポーン……と、調律もされているようだ。楽器とは縁がないが音楽は好きだから、音の気持ちの良さ悪し位はわかるつもりだ。

ふとした、気まぐれだった。

置いてあった椅子を引き出して座ると、弾けもしないのに構えて遊ぶ。

ベートーベン、ショパン、モーツァルト、シューベルト、バッハ。何から弾こうか。

そうだ、シューベルトのアヴェ・マリアにしよう。

鍵盤に手を置いてメロディを口ずさむ、独りコンサート。

一曲目が終わったら拍手をして、二曲目は……そうだ、バッハのG線上のアリアに決めた。どれも好きな曲。

そして二曲目が終わる頃、誰も居ないはずの室内に拍手が響き渡る。

驚いて振り返ると、ララが立っていた。

「な！ いつから居たの？」

穴があったら入りたい、とはまさにこの事。恥ずかしい姿を見られた私は、真っ赤な顔を背け、俯いたままでそう叫んだ。

「さっきから」

こちらへ近寄りながら優しく微笑む彼の表情に目配せして、直ぐに鍵盤へ視線を戻すと、立ち上がりながら蓋を閉めようとした。

すると、ララが後ろから私の手の甲に自分の手を掛け、それを止めた。

「待って。閉めないで」

「？」

肩越しにララの吐息が私の首筋へと触れ、更に顔が高潮する。

早鐘の様に高鳴る心臓の鼓動が、聞かれないか不安になりながらも、そのまま拒否る事も退ける事も出来ずに固まった状態で動けないでいる。と、彼が私をそっと後ろから抱き締めていった。

「……居なくなったのかと、思った……」

彼の腕に力が籠る。それは呼吸に合わせて上下する感覚すら伝わり、苦しくさえ感じた。

「……帰らないよ」

『帰れない』の間違いだ。

このとき、初めて気付いた。

私は、ララに惹かれている、と。

あんなに嫌いだったのに、うっとおしいとすら感じていたのに。

苦しいぐらいに抱きしめるその力も、体温も……全てが丁度良いとすら思える。

——このまま、壊れるまで抱き締めて欲しい。

「フォックスは、どの音楽家が好き？」

ララが問う。

何故だろう。何故だか、凄く悲しそうに見える。

「ショパン」

ポツリと呟いた。

「そう、なら三曲目は俺が弾こう」

「え？」

驚いて疑問符を投げかける私の脇に手を掛けると、ララはそのまま抱き上げピアノの上へと座らせた。

座って、やっと目線の位置が、彼と並んだ事に気付く。

続いて自分は椅子に座り直し、その長く白い指で鍵盤上を移動し始めた。

「ノクターン？」

その問いかけに、彼はそっと微笑み返しただけ。

ゆっくりとララの指に紡がれる、鍵盤の音色。

それは一つ一つがそれぞれ呼吸をし、生きている様にさえ思える。

なだらかに、優しく、そして何より悲しい……。

それ以上は何も言わなかった。

ただ、ララから生み出される一つの音色が、二人だけの孤立した空間を満たしているだけ。

永遠に続けばいいのにとすら感じた。このまま、この世界がなくなれば、もっといい。

三曲目が終わり、拍手をした。虚しいだけの拍手は、直ぐに止まる。

「幼い頃、ピアニストになりたかったんだ。天才は、欲しいものを欲しいまま手に入れる事ができるんだろうか？」

ララの、何気ない言葉。

「ショパンは……少なくともショパンは違う。だから私は好き。彼は、孤独に死んだ音楽家だ」

「孤独に？」

「そう、孤独に」

「どんな生涯？」

ショパンの生涯。私をもっとも好きだと断言できるのは、芸術とはかけ離れた……否、もっとも芸術的に属する部分なのかも知れない。

「……彼は、母と姉を見て初めてピアノを弾いたんだ。その時のショパンに才能を見た

両親は、彼に個人教授を付けた。そして七歳の時に初めて作曲し、十九歳の時にはモーツァルトのオペラを基にした変奏曲を発表、音楽界に天才の名を知らしめた。そして恋を失恋し、女流作家ジョルジュ・サンドと巡り合った。暫くは幸せだったそうだよ。けれども九年後、些細な誤解を切っ掛けに、その恋愛にも終止符が打たれたの。ショパンは独り、この世を去った」

ポロン……なんて、ララの鳴らした和音が空気を震わす。

「……俺に、才能はなかった……」

——痛い……。

痛いよ。なんで、こんなに、胸が苦しくて、痛いのだろう。

「だけど、やっぱり……孤独なのかな」

もし、もしもこの時、私がララを抱き締める事が出来たのなら未来は変わっていたのかもしれない。

素直になれなくて。

悔しいぐらい、不器用で。手、すら差し伸べられなかった。

ただ小さく見える彼をピアノの上から見下ろし、その痛みを感じる事ぐらいしか出来なかった。

「ララ……きっと、ララは、孤独なんかじゃ、ないと思う」

居ても、いいのかな？

貴方の側に。

そっと、寄り添っていても、いいですか？

そう、言えたら良かったのに。

「ありがとう」

そして、再び音楽が流れる。それは私の知らない曲だったのだけれど、凄く綺麗で優しく、それなのにやっぱり悲しくて。なんだか、ララみたいな曲だった。

ララが言うには明日の夜、本格的にパープル・アイを仕留めに行く事になったらしい。だから、今夜はレストランへ。

彼が綺麗にラッピングされた箱を手渡してきた。

「魔法使いからのプレゼント」

照れ隠しに「何言ってるの？」なんて、可愛げの無い台詞を吐きながら顔を背ける。けれど、ニヤやた口元までは隠せなかった様で、鼻で笑われた。

早速開けてみることに。

ビリビリと景気良く包装紙を剥ぎ取ると、箱の中身は真っ赤なワンピースだった。

「わあ!! 凄い！」

「色々悩んだんだけどね。やっぱり、フォックスには赤が似合うから」

思わず涙ぐみそうになる。泣かない様にワンピースを握り締めて、ぐっと堪えていたら、ララの温かい手の平が私の頭をそっと撫でた。

「着替えてみせてよ」

声が出せず、頷くと転びそうになりながら寝室へと駆け込んだ。また、鼻で笑われたけれど、不思議と腹は立たなかった。

赤いワンピースはピッタリだった。サラリとした生地の上から柔らかなシフォンが重ねられ、裾と胸元に黒のレースがあしらわれている。飾りの為に取り付けられた胸の下にラインを引くベルベットのリボンや、黒薔薇のコサージュもお洒落だし、苦手だったお姫様みたいな袖の膨らみも可愛らしい。

私には、勿体無いくらい乙女チックに思えた。

なんだか髪型が嫌になり、髪をアップに上げた。そしたら顔も気になって、念入りに化粧をした。何度か彼がノックをしては私を呼んだが、その度に「まだ！」と冷たく返す事しか出来なかった。

三十分以上経ったと思う。ララも諦めたのか、隣のリビングからはいつしか音楽が流れていた。

ギー……と言う耳障りな音と共に、扉を八インチ程開いて戸惑う。

なんだか恥ずかしくなってきた、出るに連れられなくなってしまったのだ。

「フォックス、準備出来たの？」

ララの近づく足音が聞こえる。

「え？ あ……うん、だけど……やっぱり、駄目……」

らしくない、らしくない、らしくない。

もう一人の自分が、引切り無しにそう言って来る。

扉を閉めようとしたら、ララが無理に引き開けた。

ぐいっと身体ごと引っ張られ、更に私の腕を掴んで引き寄せるから、耐えられなくなった私は勢いで彼の身体へと顔をぶつけた。

ララの匂いが私の身体中を包んで、全身に電流が走った様になった。

「駄目！ 口紅付いちゃう」

どん！ と身体を突き飛ばすようにして彼から離れる。落ちてきた残り髪を耳にかけて、逃げるようにして距離を置いた。

「ごめん、化粧付くと……汚れるから」

二人の間に、沈黙した空気が流れる。

恥ずかしくて、顔なんかまともに見られない。

最初に言葉を作ったのはララの方だった。

「似合うよ、綺麗だ」

その一言が私の琴線に触れたのか、涙がポロリと零れ落ちた。

その後暫くは覚えていない。

覚えていないけど、苦しいぐらいに、苦しすぎるぐらい幸せだった気がする。

現実に戻る

レストランは、食事もワインも二流だった。本来なら失敗したね、なんて言い合ってもおかしくないのだけれど、ララと一緒にいたせいで一流レストランからの帰りみたく思えた。

「子供達が見たら、笑うかな」

ララの腕に手を掛けて、苦笑いを向ける私。

「きっと、モテモテだよ」

ララが笑った。私も笑った。

こんなに泣いたり笑ったりした一日は、何年振りだろう。

マンションへ帰ってから再び二人でワインを一本空けた。気分が良いせいか、いつもより早く酔いが回ってきた気がして、私は少し横になることにした。

気付くといつの間にか熟睡していた様で、横になったソファの上で毛布を掛けられていた。

部屋の電気も消されているのに、ディスプレイの照明のみで、ララはパソコンに向かって難しい顔をしていた。

「ララ？」

彼が苦笑しながら振り向いた。

「ごめん、起こした？ もう寝るね」

私はクスリと笑いながら、首を左右に振った。

「ううん。喉が渴いたから、何か飲もうかなって」

「そっか、じゃあレモネード持ってきてあげるよ」

コクリと頷く。

パソコンの前を離れるララの背中を見送って、私は何気なくパソコン画面を覗き込んだ。

英語で書かれた何かのデータのよう。読む前に、ララが戻ってきた。

レモネードの入ったマグカップを受け取りながら、問いかける。

「パープル・アイについて？」

「いいや」

「なら違う賞金首？」

「いいや」

なんだろう。でも、凄く真剣だった。

「危ないこと？」

否定して欲しかった。

「そうだね」

「……そっか……」

そうなんだ。

私達は、所詮社会の埒外。

なに浮かれてるんだろう、私。

馬鹿だ、大馬鹿だ。

押し黙った私を、困った様な顔で見る。その顔がまた寂しそうで、なんだか悪い気になる。

「フォックス？」

「私もバウンティハンターだからさ、これでも一応。何か出来るなら手伝うし」

レモネードを一口飲んで、また自分の甘さに気付いた。あれ程 `信用しない、`仲間なんて有り得ない、なんて散々言っというて、虫が良すぎるよ。

だけど、ララは優しく語りだした。

「そう、嬉しいけど、こればっかは一人でやろうと思ってる」

「そう」

心配だけど、これ以上自分の甘さ加減を見せるのも嫌で、冷たく言ったつもり。

ララが続ける。

「ハンプティ・ドロって会社あるだろう」

「？」

「あそこの会社が、あるプログラムを開発したんだ。プログラム名 `G-Z。テレビ、携帯、インターネット、ラジオ等といったあらゆるメディアを使って人を殺す為のファイル。一昔前に日本であったろ、あるアニメを見ていた子供達が集団で倒れた。あれと同じ現象だ。そのプログラムが実践されれば、無差別大量虐殺が可能だ。それだけじゃない、第三次、第四次世界大戦の引き金にでもなるし、あの会社が独裁的に世界を手にする事だってできる」

「警察は？」

「警察？ フォックスだって知ってるだろ？ 警察の情報がどんなものか」

そう、表で浮上する情報なんかたかが知れている。そのたかが知れてる程度の情報を、警察が嗅ぐだけだ。ハンプティ・ドロは、表上優良会社として有名な証券会社。その社長は若くして短期間に一流企業へと浮上した。その割りに謎が多く、社員の事故死が多いからと警察が嗅ぎ回っている様な噂を耳にしたことがある。今の所、怪しげな内容は浮上していない筈。何か解れば、マスコミが必要以上に駆り立てるだろう。だからもしこの話が既に表社会に洩れているんだとしたら、世間様がこんなに静かな筈が無い。

「それで、どうするの？」

ララがひとつのUSBを出して見せた。

「ハンプティ・ドロのメインコンピューターに直接コイツを流し込む。コイツは特殊なコンピューターウィルスでね、挿入した途端5秒もせずに中のプログラムを荒らすだけ荒らして抹消してしまう」

「危ないね」

なんて言っていていか解らず、気の利かない言葉が口を付いた。

「そう、危ないからね。これは俺がやらなきゃいけない事」

なんで？

「さあ、寝ようか？」

ララが笑った。

ねえ、なんで？

なんで、ララがやらなきゃいけないの？

「なんで？」

「え？」

はっとして、口を噤んだ。

「……ごめん……」

やっぱり、どうかしてる。

そんな私にも、ララは優しくて。

ララのその手は、温かくて。そっと私の頭を撫でる。

「守りたい、モノがあるから」

——それが私であれば良いと願うのは、神様……厚かましいでしょうか？

** ** *

翌日、ララは暗くなるまで家にいた。

家を出る少し前まで、真剣な面持ちで拳銃を掃除していた。

「ララ」

「ん？」

「今晚、パープル・アイを仕留めに行くんだよね？」

分解された拳銃が、あのノクターンを奏でた指と同じ指先で組み立てられる。流石に、慣れたものだ。

「そうだよ」

「もし、現れなかったら？」

「現れるさ」

カチャリ、と銃が鳴いた。

「今晚は遅くなるから、先に寝てて」

「うん」

「行って来るよ」

「うん」

なんで、止められないんだろう。

なんて思いながら、彼が出て行った後の扉を見つめて大きく溜め息を吐いた。

願わくば、ララが無事に帰ってくることだけだ。

パープル・アイがどんな奴かは知らない。けど、危険なことに変わりはない。
それはジェヴィットが時折見せた表情の影からも、拳銃を磨きながらララが見せた真剣な面影からも感じ取れる事実だった。
冷蔵庫からワインを一本取り出した。グラスに注ぐとそれはまるで流れ出る血液のようで、私の中に渦巻く不安要素に大きく刺激を与える。味がしないので、一杯以上は飲む気がしなくなった。
その晩はたいして眠くはなかったのだけれど、シャワーを浴びて早々ベッドに潜り込んだ。
何もする気が起きなかった。
翌朝目覚めたときララが近くにいることを願って、そうだ、朝の珈琲は私が淹れよう等と考えながら瞼を閉じた。

どのくらい眠っていたのか。多分、そんなに時間は経っていないはず。
私は、けたたましい携帯電話の呼び出し音によって叩き起こされた。

無視しても良かったのだが、何やら胸騒ぎがする。眠い目を擦りながら、私は電話に出た。

「……あい？」

だが暫くは誰も答えず、変わりに妙な雑音と、はあはあ等という荒い呼吸の音がするだけだった。

ディスプレイを見ていなかったのも、今更、誰からの電話か解らない。

「……もしもし……？」

胸騒ぎは心臓の鼓動が大きくなる度、不安として膨張する。

『……フォ……フォックス……』

ようやく届いた声は、ジェヴィットだった。

「何？ ジェヴィット?! どうしたの？」

『……助け……て……くれ……死にたく……ないんだ……』

「どこにいるの？ どうなってるの？」

多分、必死になって走ってるんだろう。荒い息の隙を縫うように、途切れ途切れの言葉が続けられ、声は酷く掠れていた。

『……工……場……奴は……天才だ……殺しの……。パープル・アイの……パープル・アイは……』

そこで突如、耳を覆うような銃声が一発。

『ツ……ツ……ツ……』

電話は途切れた。

身体が、震えだす。全身から血の気が失せるのが良くわかった。指先が震えて上手く言うことをきかない。

けれど必死になってメモリーを呼び出す。

そう、ララの携帯電話。

最初に頭に浮かんだのはララの事。

ララは生きてるんだろうか？

もしかして、既にもう……

頭を左右に大きく振った。と、同時に目に涙が浮かんできた。

何度も何度もかけ直すが、やはり彼は電話に出ない。

居た堪れなくなった私は、無我夢中で部屋を飛び出した。

パープルアイ

雑草の多い茂る、廃墟同然の工場跡。

夜ともなれば、不気味さが増している。

明かりらしい明かりといえば、空にぽっかりと浮かぶお月様だけ。

静かだ。

ジェヴィットからの電話が嘘のように。否、静か過ぎて逆に不気味だ。

カチャリ、と愛用の銃を鳴らすと、構えて車を降りた。

風だ。生暖かい風が吹き、それに乗って僅かに硝煙の匂いが鼻腔を付いた。

馬鹿だ、私。

この場において、ようやく解った。

だいの男が何人かかってもどうにもならない相手なのに、女一人が来たところで何が出来る？

それでも来てしまった以上後には引けず、周りに気を配りながら恐る恐る奥へと進んでいった。

暫く歩いていたら多い茂る雑草の中、何か柔らかいものが爪先に当たった。

声が出るのをかろうじて噛み殺し、ゆっくりとそれに目を向ける。

暗がりの中徐々に露になるそれは、紛れも無くアルバートの死体だった。

再び悲鳴を噛み殺す。

幸か不幸か死体を見慣れている為腰を抜かず程の可愛らしさは持ち合わせていないが、それでも友人が殺されたショックはそれなりにでかかった。

首筋の綺麗な部分に手を触れてみると、まだほんのりと温かさは残るが脈は無い。恐らく、死んでからそれ程時間が経っていない様だ。

心拍の鼓動や血液が流れる音、呼吸の音、自分の全ての音、が五月蠅いくらい耳に響く。

ノイズを遮る様拳銃を握る手に力を込めなおした。

アルバートの死体から手を放し、ふらりと立ち上がる。

「……ララ……」

急に蚊の鳴く様な声が出た。

一筋の涙が、頬を伝って地面に落ちる。ごしごしとそれを拭い取ると、どうするべきか考え、暫くの間立ち尽くしたままだった。

深呼吸を繰り返し、右足を踏み出そうとしたとき背後で枝を踏み折る音がした。

そのパキッという音に向けて拳銃を構えようと身体を振った時、振り向き様後頭部下の首筋を思いっきり殴られた。

霞み行く視界の向こう側、月の光に照らされてばかりと光放つその姿。

——紛れも無い、紫色のガラスの義眼だ。

「……パープル・アイ……」

情けなくも、私にそれ以降の記憶は無い。

* * * *

人は誰かを愛すると、優しくなれるのだろうか？

女は恋をすると、本当に美しくなれるのだろうか？

自分の中で何か壊れ、崩れ、そして何か生まれ、変わっていく……。

私は、ララのベッドの上で目を覚ました。

あ後の事は何一つ覚えていない。

キッチンから何やら物音がする。多分、ララが何かしてるんだろう。

頭が、ズキズキと痛い。

上着と銃がハンガーに掛けられ、ベッド脇に引っ掛けられている。そこから、銃を取り出した。

瞼に焼きつく最後の光景。

暗闇の中浮かび上がる紫の眼に、僅かに通った良く知った香水の香り。

私は、膝を抱えたまま、静かに泣いた。

嗚咽は絶対に洩らせないと思って、必死で堪えて、歯を食いしばって泣いていた。

ジェヴィットもアルバートも、もう居ない。

だけど、それより……。

三十分程泣いていたと思う。

泣き腫らした目を気にするまもなく、拳銃のマガジンを取り出した。弾は抜かれていなかった。

再び装着すると、あの小気味良い音がする。いつもは心地よく感じる音も、今の私にとっては重い以外のなにものでもなかった。

私は、ベッドから降りた。

リビングに行くと、ララが珈琲を手にパソコン画面を覗き込んでいた。

私に気付き、振り向いた。あの、いつもの笑顔で。

「気が付いたんだ。レモネード、作ろうか？」

ララは、右目に眼帯を付けている。

ドラッグストアやコンビニで売っているような、プラスチック製の白いやつ。その安っぽい光沢が蛍光灯に反射し、痛々しくも見える。

立ち上がるララの問いを無視し、私が質問を返す。

「ねえ、右目どうしたのさ？」

彼は少し困ったように言った。

「ああ、パープル・アイにやられてね。ジェヴィットもアルバートも殺られてさ、俺だけ逃がしてくれたんだ。二人とも最後まで勇敢に立ち向かって……」

「もういいわ」

ララの台詞を最後まで聞かず、遮った。同時に、涙が溢れ出す。

駄目だ……。涙が、止まらない。

私は向き直るララに、拳銃を向けた。

「ララの右目が、義眼だった事くらい知ってる」

「フッオックス」

泣き顔を晒したくなくて、俯いたものの顔が上げられない。こんなんじゃ、銃なんて撃てる訳がない。

情けなくも噛み殺しきれない嗚咽が洩れる。

「撃てよ」

冷たい、彼の声が耳に響いた。

「全部、騙してた？」

「ああ」

いつだって、否定して欲しいときに限って、否定してはくれないんだ。

「……何故、あの時殺さなかったの？」

「殺せなかったんだ」

歪んだ視界で、ララの顔を見上げた。向かい合う彼は……ララは、全く別の人間に見えた。

私の、知らないララ。

殺し屋、パープル・アイのララ。

言いたい事は山ほどあるのに、言葉にならない。

黙りこくった私に、彼は諦めたように言葉を作った。

「いつ、気付いた？」

「逆光でも暗闇でも、ララの匂いはわかるわ」

答えるのが、精一杯。

「……匂い……か……」

ふっと、晒う。

「信じたくなかったよ!! 自分を疑っていたかった」

ララが眼帯のゴムに手をかけ、それを外した。同時に、銀色の髪を掻き分け、その目を

向けた。

右目に紫の義眼が、左目にはいつのも藍色の眼が覗いている。

「俺の目を良く見てみな。今の俺はララじゃない、パープル・アイだ。お前を殺す殺し屋だ」

ララがゆっくり歩み出て、私の握る拳銃の口が、彼の胸部に密着した。思わず私の左足は下がるものの、後に引くことはしなかった。

「いつか、覚悟してた事だ。フォックスになら、殺されても構わないさ」

「なんで、パープル・アイなのさ？」

彼は、悲しそうに言う。

「それが真実だから」

「そんな」

ララの手がふいに、俯く私の顔へと流れ落ちる赤毛を掻き上げた。

「何故、あのとき殺せなかったんだと思う？」

何故こんな時ですら、ララは優しいのだろう。

「知らない。取り乱す私を面白がってた？ それとも、気付かなければ殺す手間も省けるのに、とでも？」

何故こんな時ですら、私は素直じゃないんだろう。

ララは言う。

「愛してる」

私の、身体が震えだす。

「それも嘘でしょ」

今度は、彼の手が私の頬を優しく撫でた。

「なあ、フォックス。一緒に、死のうか？」

それも、いいと思った。

世の中には、きっと人の為にしか生きられない人間と、自分の為にしか生きられない人間がいると思う。

なら私は、自分の為にしか生きられない人間だ。

人の為にしか生きられない人間が自分の為だけには生きられない様に、この手の人間はどうしても人の為には生きる事ができない人間なのだ。

それは器用か不器用か……いいや、それ以前の問題で、多分、人の生まれ持った性質なんだと思う。

「死にたければ勝手に死ね。私を……巻き込むな」

引き金なんか、引けなくて。引き金の引けない拳銃を、私はずっとララに押し当てている。

その拳銃を離すと、グリップをララに向けて呟いた。

「そうじゃない」

もっとも、卑怯な行動だけれど、こうするしかなかった。

「……ララが……選べばいい……」

彼が、銃を受け取った。

「自殺するか。私を殺して、あんたも死ぬか。それはララが決めたらしい」

——ねえ、神様。神様は、本当にいるんですか？ もしもいるのであれば、何故私達だけには冷たいの？

手渡した銃を握り締め、徐に腕を上げながら銃口を自らのこめかみに押し当てる、彼。
私も、ゆっくり瞼を閉じた。

銃声の代わりに鉄の塊が床にぶつかる重たい音を聞いたとき、私はただただその場に泣き崩れるララを抱きかかえながら、私自身も涙を流す事ぐらいしか出来なかった。

ララ

月が眠る時間。空から星の瞬きが色褪せ、闇から紺色へ、紺から蒼色へと姿を変える。更には幾つもの暖色の帯がグラデーションを描き始め、夜の色に上乘せしながら朝へと表情を変えていく。

窓に取り付けられたカーテンの合間から、金色の光が洩れ始めた。

カーテンを開けるつもりはない。今は、外の世界から遮断されていたかった。

泣き腫らした目で俯いたままソファに腰掛けるララへと、私は熱い珈琲を差し出した。

それと毛布を肩へ掛けてやり、私も熱い珈琲を持ったままその毛布に身体を入れた。

密着する勇気もなかったので、少し不自然な程度に距離がある。この距離が、今は地球の裏側にいるぐらい遠く感じて仕方がない。

珈琲に視線を落とす。と、それは昨晚の闇の様に真っ黒に揺れていた。

一口飲むと、やはり昨晚の涙の様に苦く感じた。

気の利いた台詞が思い浮かぶ筈もなく、ましてや私に慰める権利なんかない。

一緒に死んでやった方が、幾分か親切だったような気がする。

このまま、無言のままでもいい。そんなことを考え始めていた時

「……寒い村……」

ララの重たい口が言葉を語り始めた。

「俺は、寒い村で生まれたんだ」

私は、それを黙って聞いた。

「それも、貧乏な村。俺の家は特に貧乏で、パンどころか卵一つ手に入れるのにも苦労してた。母さんは、寝る間も惜しんで働いた。父さんはいなかった。俺が母さんの腹に出来たとき、居なくなると聞いた。でも、母さんは父さんがいつか戻ってくる。そう、いつも言っていた」

ララの話は意外だった。その声に感情はなかったけれど、語るリズムは優しかった。

「母さんはピアニストだった。母さんが大事にしていたピアノがあったんだ。弾き方も、曲も、母さんから教わった。十歳のとき、寒波が益々酷くなって、唯でさえ手に入りにくかった食料が減少し、物価が上昇した。それで、やむなくピアノも手放さなければならなくなった。母さんが泣き崩れている姿、まだ覚えてる」

ララが、珈琲を一口飲んだ。泣きたいのを堪えている様子にも見えた。そして続ける。

「親友がいたんだ。俺達は学校に行く金もなかったから、金持ちが要らなくなった教科書と一緒に勉強をしたり、仕事を手伝いあったりした仲だった。だけどそいつが、寒波の年に飢えに耐えかねて盗みを働いた。卵一個に懲役三十五年だ。それも子供の盗みだ。馬鹿げてる。そして翌年、鉄格子の中で……チフスで死んだと聞いた」

俯いたまま、ララが泣いているのがわかった。

珈琲がしょっぱくなるくらい、涙が落ちていた。

私はただ、そんな彼に身体を寄せることしか出来なくて。

拍動と共に、心の痛みが伝わってくる気がした。少しでも、その痛みが私に移ればいい。

そう、思った。

「十五歳の時、母さんが脳と肺を患って倒れた。薪を指差して、‘パンが食べたいから取って、なんていうくらいおかしかった。パンなんてどこにもありゃしない。パンだけじゃない、食べ物がないんだ。十五歳のガキが働いた ‘お駄賃、程度じゃ、村では卵一つ買えやしない。その時、村では闇市の話が持ち上がっていた。貧乏な村だったから仕方ない。子供や、臓器を売買して金に換える商売だ。健康な人間の ‘身体、は高く売れると聞いた。だから俺は自分を売った。まずは右目、そして腎臓……そこそこ金にはなった。だけど、金は直ぐに底を尽きた。ガキだから、通常の三分の一しか支払われていなかったんだ。母さんの治療も出来なかった。日々衰弱する母さんを見て、俺は夢中で村人を……」

ララの言葉が詰まった。けど、続けられる筈の言葉は予想できた。

「……惨殺……して回った」

ララの右目は、きっと今でも罪の重さを見つめている。そして左目はきっと、今だけを見つめている。

それは永遠に変わる事がなくて、彼が生きている限り亡霊の様に取り憑くのだろう。

そう、パープル・アイの亡霊だ。

「沢山の臓器と目。これできっと俺は、俺と母さんは助かる。そう思った。けど、気付いたとき母さんは死んでいた。三日前に……とっくに死んでいたんだ。そこで、俺の中で何か壊れた。いや、きつともうとっくに壊れてた。その後は何も覚えちゃいない。目が覚めた時は、包帯まみれのミイラ姿で、警察病院のベッドの中にいたんだ。警察が言うには、酷い凍傷と飢えと寒さと、切り傷の出血多量で死に掛けていたらしい。おびただしい血痕が真っ白い雪の上を這うように続いていて、その先に俺が落ちていたと。改めて自分を鏡で見て、髪が真っ白になっているのに気付いたのも警察でだった。その後証言した。紫の眼の男に、殺されそうになったと。なんでそんな事を言ったのかわからない。ただ、怖かった。怖くてしょうがなくて……証言してから半日とせず、俺は病院を抜け出した」

何も、言えない。

言える、筈もない。

何も……。

その痛みすら、解り切る事なんて、出来ないよ……。

「それから、死ぬことが怖くて……ただ、それだけの為に……生きる為だけに人を殺してきた。パープル・アイを狙う奴は、殺さなきゃいけないと思った。そうでなきゃ、いつか俺自身が殺されるって。俺が俺自身を正当化する為に、パープル・アイになった。身勝手だけど、自分を守る為だけに俺は人殺しをする。今日も、明日も、明後日も……ずっと……。その度、俺の中でも何かが死んでいく」

ララが話を終えた後、暫く私達は沈黙の中にいた。

小鳥のさえずりを聞いたとき、カーテンの隙間から見えた空は、薄情なまでに青く澄み渡っていた。

最強と共に

いつしか眠っていたようで、カクンと首のバランスが崩れたとき、反射的に目が覚めた。毛布をいつの間にか独り占めにしていて、隣に居た筈のララが居なくなっている。

「ララ？」

呼んでみるが、案の定返事はない。

ついでに部屋中を当たってみるが、やはり姿はない。

靴もなくなっていた。

どう考えても、外出中だ。

心臓が、再び激しく高鳴りだす。

ララと出逢ってから、自分でも嫌になるくらい感情の起伏が激しい。情けないくらい、感情がコントロールできなくて、まるで子供の様に、ララがいないと不安で仕方がない。

ジェヴィットやアルバート……私の大事な人達を殺した男なのに何故だか恨めなくて。それどころか、それにも増して大切だなんて思ってしまう。

何処？ なんて考えるより先に、私は工場跡地に向けて車を出していた。

そこにララがいる確信はない。もしかしたら、既にそのまま放置してあるであろうジェヴィットとアルバートの死体も発見され、警察によって進入禁止にされているかも知れない。

けれど、今の私にはそこしか思いつかなかった。

工場跡地に着いたときは、既に正午を回っていた。

そこから僅かに離れた街では何も知らない学生やビジネスマン等が、ランチタイムでも楽しんでいることだろう。それから刑務所ではポリスマンがドーナツの代わりにハンバーガーにでもかぶり付き、鉄格子向こうでは間抜けなアウトロー達が臭い飯でも奪い合っているんだろう。誰もが一息吐ける時間だ。

銃を抜いて、車を降りる。どうやら、まだ誰にも発見されていないようだ。

当たり前か。なんて心の中で呟きながらも、規則正しく鳴り響く己の鼓動へと耳を傾けていた。

雑草の茂る奥へと歩みを進める。が、暫く進んだところで徒ならぬ異臭に、思わず身体が仰け反る。鼻がもげそうだ。

どうやら死体が既に腐敗し始めているらしい。おまけに昨晚野犬にでも食い荒らされたんだろう。腸（はらわた）の一部らしきものがチョコレートの様な色になって、所々に転々としている。焼け付くような胃酸が、喉元まで込み上がってきた。

銃を握り締めつつ手の甲で鼻の周りを覆うと、顔を顰めながらもミンチを見ない様に、更に奥へと進んだ。

シャッターが三分の一程開け放たれたコンクリートの建物、あのララと初めて出逢った場所だ。中には、やはり動かなくなったベルトコンベヤーがそのままの姿で放置されており、その影に相も変わらずリンゴの木箱が置かれたままだった。

箱の中を覗くと発泡スチロールの梱包材が敷き詰められていて、それを退けてみると大量の弾薬や重火器、爆弾がまだそのままの状態が残っていた。

その中にあったマシンガンの一つを、なんとなく手に取ったときだ。

「銃声？」

豆の弾ける様な音が聞こえた。それも微妙なズレはあったものの、ほぼ同時に。

ついでなのでマシンガンに銃弾を込め、銃弾の束を肩から掛けて逆側の出口へと身体を移動させた。

裏口はドアでの開閉式になっていて、その前で立ち止まって耳を済ませる。やはり、銃声が聞こえる。

やっぱり、ララは此処に？

心の中で、呼吸と共に三カウント唱える。

…… 3 …… 2 …… 1 ……

0と同時に扉を開くと、銃弾が私の目の前を紙一重で通過し、古びた鉄の扉にめり込んだ。

今度は身を潜めて覗き込むと、外にはドラム缶が幾つか放置されており、その向こうにはタイヤもなく塗装も殆どが剥がれて茶色く錆び付いた車が放置してあった。

その影に人影が確認できたが、多分ララではない。

右奥のドラム缶の影、アレも多分違う。

もしかして、全く関係のない場所に来たのかも知れない。

本当は、ララはスーパーとかに行行って入れ違いになったんだとか、そんな程度の勘違いだったら嬉しい。

苦しい程の不安も、楽でいられる。

何度考えたのか、何度祈ったかわからない。もっと、別の形で二人巡り逢えたら良かったのにと。

とりあえず、お呼びでないことを祈って、確認だけしたい。こう隠れてドンパチされたんじゃ、ララがいないかどうかすらわかりゃしない。

致し方ない。

私は大きく溜め息とも深呼吸とも言いがたい呼吸をすると、天に向かってマシンガンを乱射した。

そして直ぐ左側に転がっていたドラム缶の影に、転がるように潜り込んだ。

バスバスと脇のドラム缶に穴が開く。

手榴弾も、持ってこれば良かったな。浅はかな自分に苦笑い。

一呼吸置いてから周りを見渡そうとすると、再びこちらに向けて銃声が響いてきた。

バスバスと別のドラム缶に穴が開く。

同時に、覆いかぶさるように人が転がり込んできた。

「うぷっ!!」

妙な空気が洩れたような声が出る。それでも、その人物から滲み出る匂いに涙が出そうになった。

「馬鹿!!」

そう、ララが耳元で呟いた。

「ララ、やっぱりいたんだ」

「なんで、来たんだよ」

その声は、怒っている様に聞こえた。

「だって、いなかったから」

なんだろう？ 妙な罪悪感が全身を満たす。と、同時に安堵した。ララの覆いかぶさっていた身体が、私の身体を抱きしめるかのように、ぎゅっと力が込められる。

ポタリ、ポタリ……と、何かが頬に乗った。

涙ではない。だって、彼の顔は私の頭の上にある。

暫くララに包まれて、身体が離れてようやく気が付いた。左肩が、紺色のスーツの左肩から上腕に掛けて、ぐっしょり濡れて色が濃くなって見える。

自分の頬に乗る雫に手を滑らすと、滑らした指先は真っ赤だった。

「逃げろ、お前はまだ見られてないから」

ララは険しい顔を見せた後に、笑って見せた。

この場に及んで、まだあの笑顔を見せるのだから、泣いてしまいそう。

「何が、あったの？ 怪我してるじゃない」

「大丈夫。こんなのかすり傷だ」

どこがだ。

見る限り、満身に動かさなくせに。

私は、彼の傷口を軽く握った。

「痛っ!!」

ララは悲鳴に近い声を上げ、顔を背けながら大丈夫大丈夫と震える声で繰り返す。私に言っているのか、自分に言い聞かせているのかさえ解らない有様。

「大丈夫じゃないじゃん」

頬を膨らましなが、目を細めて言ってやる。

「そりゃ、傷口握られたら痛いに決まってるだろ」

ちょっと泣きそうな顔だ。

私は上着を脱いで力一杯引き裂くと、彼の傷口に縛り付けた。

「私は、ララと帰る」

ララが、きょんとした。

「もう、やめよう？ 私は、ララといるから。ずっと、いるから」

ララの顔が険しく変わる。

「自分で何言ってるのか、解ってるのか？ 俺と生きる？ 馬鹿な事言うな。さあ、帰るんだ。俺が援護するから、フォックスは出口まで走るんだ」

重たい左手を庇いながら、彼はドラム缶脇に銃を構えて身を潜めた。

私も負けじとマシンガンを握りしめた。

ごめん、ララ。

これでもさ、私はバウンティ・ハンターなんだよ？

一時は、あんたの命を狙った女だ。腹は決まってるから。

ララより早く、その場から駆け出た。

乱射するマシンガンが、確かな手応えを伝えてくれた。

男の悲鳴と、時々舞い上がる血飛沫が、綺麗なモスグリーンの草に乗った。

多い茂る雑草が有難い。時々肌に触れるとチクチクするが、手入れされていない分背丈も高く身を隠すには丁度いい。

滑り込むように、反対側のドラム缶の影に転がり込む。

ふとララに目をやると、彼は額に指を付きながら、呆れたような暗い表情でこっちを見ていた。とりあえず、私はララにVサインを返す。

彼も隙を見計らって、こちらに来た。

到着がてらマガジンを抜き出し新しいものと入れ替えようとするが、左手が満足に動かせない為手こずっている。

「畜生！」

小さく吐き捨てた悪態も、私には聞こえた。

彼の握り締めるハンドガンは、通常のハンドガンより一回り程大きい。

普段なら違和感なく見えるだろうが、深手を負おう今のララにはいささか大きすぎるように見えて仕方がない。

ねと付いた血液に滑り、地面にマガジンが落下した。それを、代わりに私が拾い上げた。

「ララ」

マシンガンを置いて、その手を差し出した。

無言で渡された銃に私がマガジンを差し込むと、弾倉は小気味良い音を鳴らした。

銃を返しながら問う。

「本当に、何があったのさ？」

顔を背けた拍子にあの綺麗な銀色の髪が揺れ、その合間から冷たく突き刺さるような紫の眼が覗いた。

膨れた様に返答する。

「しくじったんだよ」

と。

「ジェヴィットと出会う前に、仕留めた筈の賞金稼ぎがいたんだ。だけど、そいつ生きて。俺がパープル・アイだって情報が洩れてた。今朝方マンションに人が訪ねて来たんだ。そいつがその賞金稼ぎの仲間で、大人しくすれば女にだけは手を出さないって」

「何よ、それ？」

「付け狙ってたんだ。ジェヴィット達が狙ってるのを知ってて、俺がアッチに気を取られてる隙に仕留めるつもりでいたんだろ。それでフォックスの事を知って、上手い具合に利用しようとしたんだ、きっと」

一息吐いて、ララが再び銃を構える。

少しふらついた様にも思えた。出血のせいか顔色が悪い。

「ララ、何人いるの？」

「多分四人だ。けど、フォックスと合わせて既に三人は殺った」

私も、マシンガンを取り直した。

「ララ。これが済んだら、日本に行こう？」

「は？」

「いいや。やっぱり、マジョルカ島がいい。うん、アッチの方がピッタリだ」

「何言ってる？」

私は、ララの背中へとしがみつく様に身を寄せた。

「静かに生きよう？ 銃を捨てて。ショパンがジョルジュと暮らしたように、静かに」

「……フォックス……」

彼の手が、私の頭を優しく撫でた。

「うん」

——神様、やり直すこと出来ますか？

——人として生きていくこと、許してくれますか？

顔いた笑顔のララの右眼が、その一瞬だけあの冷たい紫の眼ではなく、優しい瑠璃色の眼になった気がした。

だけど、いつまでもこんな夢見心地をさせる訳にはいかなくて。直ぐに現実へと向き直る。

「私がやる。だから、ララはそこにいて。それ以上、動いたら本当に死んじゃうよ」

彼が鼻で笑った。

「逞しいよ。ジェヴィットが言ってた通りだ」

「言われなれてるよ」

左端に人影が動いた。

瞬間、私も転がるように飛び出しながら銃を乱射した。

「ぎゃあ！」

悲鳴とドラム缶にぶち当たる鈍い音がして、軽く注意を払いながら止めの銃弾を何発かぶち込んだ。

ララの情報によると、これで最後の筈。

軽く銃を天に向かって乱射し、落ちていた石を茂みに向かって投げ込んだ。石が転がると獣が動くような音になったが、銃声はない。本当に四人だったようだ。

……終わったんだ……

私は、ふらりと立ち上がった。そしてその場にマシンガンと、肩に掛けていた重々しい銃弾を投げ捨てた。

変な安堵に、涙が溢れてきた。

いつから、こんなに泣き虫になったんだろう。

亡霊の様にララの元に歩み寄る。

「ララ、終わったよ。早く、逃げよう。こんな場所、嫌だよ」

ズシャリと、彼の側で膝を付いた。

「フォックス。お前、泣いてんの？」

さっきより血の気のない顔で、苦笑いを寄こす。

「泣いてないよ」

ララの指先が震えながら私の頬に触れようとしたとき、紫の眼に影が落ちた。

ドン!!

「くっ！」

訳がわからなかった。

ただ一発の銃声がして。

その直後私はいつの間にか仰向けになっていて、目の前の男に銃弾を叩き込んでいた。

……それも、ララの銃で。

男が音もなく後ろへと倒れこんだとき、今ある現状が初めて脳へと通達された。

私の腹部に、顔を埋めるララの四肢。草に付く手に、何か生暖かいものが触れた。

一気に全身から血が失せて、歯がガチガチ鳴るほど全身が震えだした。

「……ラ……ラ……」

そっと身体を反転させて、私の大腿部へと頭を乗せた。

銀色の髪を掻き分けると、ララの眉根が苦しそうに動いた。

「……ララ……今、医者に連れてってあげるから」

先程からの出血のせいか、急速に体温が消えていく。

私の目から溢れ出る涙が、彼の頬に乗っては滑り落ちる。何度も何度も、滑り落ちる。

「……フォックス……」

「喋ったら駄目だよ……駄目だよ……一緒に……」

駄目だ……言葉が……出てこないよ……。

ララが笑ったように見えた。

「……殺せ……」

確かに、聞こえた。

「……何？ ……言ってるの？」

口元が痙攣しているかのように引きつる。

馬鹿なこと……言わないで……。

「……俺を殺る事……それが……最強である事……俺と、生きる……意味……」

声にはならなかった。

けど、私には確かに届いた。

……そう、届いた。

「馬鹿なこと言わないでよ!!なんで、そんな……身勝手だよ!」

精一杯怒鳴った。

力の抜ける感覚、遅くなる拍動、徐々に温かみを失う体温、血の気のない皮膚……全てを自分の事のように感じながら、それを否定したくて叫んだ。

「……地獄で待ってる……」

いつだってララは、否定して欲しい時に否定しない。

私だけ生きて、どうするのさ?

ねえ、教えてよ。

「……楽に……」

弾の当たり所が悪かった様で、ララの身体が苦しみに悶えながら、そう叫んだ。

私は、彼の唇へと最初で最後の口付けを交わすと、気が狂ったように拳銃を握り締めた。

……一発……

……二発……

……三発……

……

……

……

……こうする事で……ララは……救われたんだろうか……?

「うあああああああ……!!」

この真っ赤な血液が、全て薔薇であればいい。

何度も何度も祈ったけれど、奇跡は起こらなかった。

ただ、彼は……ララは優しい寝顔をしていただけ。

「ああああああ……!!」

私もこめかみへと銃口を向けたのだけれど、昨晚のララの様に引き金を引くことは出来なかった。

ノクターン

「最強、それがララと共に生きること。

ララという、証。

三日後、工場跡地から死体が発見されたとニュースが流れた。やはり、犯人はパープル・アイ。

裏の世界だけだ。

パープル・アイを殺ったと、シルバー・フォックスの名が通ったのは。

それは虚しい以外のなんにでもなかった。

ララがいなくなってから多分一週間後、遺留品を片付けようとマンションを訪れた。

まだなんとなく彼が生きているような気がして、ただ信じたくなかっただけなのかも知れないけど、それまでずっとあの部屋に帰れないでいた。

マンションの部屋は、がらんとしていた。けれど、匂いも寂びた雰囲気も一緒にいた時のままで、奥からララがひょっこり出てくるんじゃないかと思えたんだ。

『お帰り。どこ行ってたんだ？』

ゆっくり足を進ませる。

重い足取りが、もう二度と逢う事のない彼を探し出す。

『もうすぐ夕飯できるんだ。オムライス、好き？』

もう悲しさも、独りぼっちも、孤独も、虚しさも……飽きるぐらい味わって、涙も枯れ果てるくらいに流したと思っていたのに。また……涙が……。

『さあ、どんな曲がいい？』

ピアノの前で、私の身体は崩れ落ちた。

誰もいる筈がなく、フローリングの床に水溜りが出来るくらい涙を零した。

『……俺に、才能はなかった……』

無機質で、冷たい部屋。いつでも、引っ越せるような寂しい部屋。
……そう、モノトーンの部屋に、独り取り残されたまま泣き崩れている……。
「……ララ……」

後にも先にも、私が今までで一番泣いたのはこの時だけだった。
そして、もうこの場所へ二度と足を踏み入れることはない。

** **

「お姉ちゃん、お兄ちゃんは？」
子供達が心配そうに尋ねてきた。
「お兄ちゃんは、お仕事で遠くへ行ったの」
「ええ?! いつ帰ってくるの？」
何も知らない子供達は、無邪気なモノだ。
「もう、帰ってこれないの」
「なんで？」
「遠すぎて、帰って来れないの」
「お姉ちゃんはあるんだよね？」
「お姉ちゃんも、もう遠くへ行くのよ」
「お兄ちゃんのところ？」
私は、首を左右にゆっくり振ることしか出来なかった。
呆然と立ち尽くす子供達を残し、私はある場所に向かった。

その場所へは、車を飛ばして一時間と数分で辿り着く。
少し歩けば、きらきらと金の粉が眩しく反射する青い海が見える場所。緑ざわめく木々
の間からも同様に、金色の光が差し込む。陽当たりがいい。
ここなら、寒くないだろうと思ったから。
白い墓石が並ぶ中、一つの真新しい墓標の前に薔薇の花束を添えた。
何度も、何度も祈ったけれど、届かなかった願いだ。
赤いワンピースドレスに、赤い薔薇の花束。
本来こんな場所には不釣り合いだけれど、私達の間には一番相応しい様に思えた。
「また」
そう小さく呟いて、私は踵を返した。

私の手の中には、ひとつのUSBが握られている。

ララが、守ろうとしていたもの。

もし彼を追うなら、ララが守りたかったものを守ってからでもいいんじゃないかと思ったから。

私は、死ねなかった。

ララの為に私が……私に、唯一できる事だ。

車に乗り込んで早々、ラジオを付けた。

誰がリクエストしたのか。

その時流れていたノクターンは、聴きなれた曲にも関わらず、全く別の曲のように思えた。

Egg-ノクターン-

著 鞍馬 榊音(くらしおん)

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
